

パンデミック感染下の先端医療と医療者の罹患体験 ——Cushingの事績をたどって

柳澤 隆昭

東京慈恵会医科大学脳神経外科学講座

新型コロナウイルス COVID-19 感染は、定義通りのパンデミック感染となり、ワクチン開発や治療開発で一定の成果をあげているものの、世界的に今日もなお終息の見通しがたっていない。このような状況下において、各分野の医療は、大きな制限の中、その在り方を問われてきており、今後の方向性も問題となり議論となっている。

第119回日本医史学会総会・学術大会での「希望のよりどころとしての医史学—小児髄芽腫治療の歴史—」の発表において、髄芽腫治療の文字通りの開拓者としてとりあげた脳神経外科医 Harvey Williams Cushing (1869–1939) は、100年前に、パンデミック感染下で、当時の「先端的医療」である脳神経外科診療に従事する中で、自ら感染症に罹患し、更に重篤な神経疾患を発症している。Cushing は腫瘍のみならず、あらゆる領域の脳神経外科的治療の開拓者であるのみならず、腫瘍標本の保存や臨床所見の集積など研究者でもあり、また多くの後継者を育てた教育者でもあった。このような中で、当時の診療状況や自身の罹患状況とその後の経過も、診療記録、自身の日記、同僚や医療者・研究者との書簡、同僚や研究者による記録などに、詳細に多方面にわたって記録されており、当時の状況を、まるで現在の記録であるかのようにその事績をたどることが可能である。

Cushing は、1910年、外科学教授 (Moseley Professor) としてハーバード大学に招聘され、1912年ジョンズ・ホプキンス病院を退職する。このようにしてボストンに転任してまもなく、第一次世界大戦が始まり、Cushing はハーバード大学救急医療隊を組織し、1915年初め、Pershing, Hugh Young ら他の指導的な医師らと共にフランスに渡った。後に第5基地病院のディレクター、アメリカ軍遠征部隊の脳神経外科のシニア・コンサルタントとして活躍し、頭部外傷の治療において、洗練された脳神経外科技術によって、死亡率を半減させたといわれている。この時期は、良く知られるように通称「スペイン風邪」のパンデミック感染下にあり、ボストンの感染診療のため、医師の追加派遣が困難になっているなど、滞在中のパンデミック感染の先端的診療への影響を多方面によって読みとることができる。

このような診療の状況下で、Cushing 自身が1918年8月、自身の日記の記録によれば、自分は Spanish flu と考える N.Y.D (not yet diagnosed disease) で3日間病床に臥せた後に、両上下肢の筋力低下、腱反射消失、知覚障害、痺れと、両側の顔面神経麻痺、複視が出現し、1か月あまり病床に臥した。このため、脳神経外科診療は困難となった。発症からその後の経過の詳細は、自身の日記、書簡、同僚・友人の記録にたどることが可能である。当時は、血管性の多発神経炎などの記載がなされ、Cushing が没するまでも、確定診断には至っていないが、今日では、これらの記録から、ギラン・バレー症候群 (Guillain-Barre Syndrome, GBS) であったと診断される。日記には、これらの神経症状の回復には2年近くかかったが、その時点でも、なお完全には回復しきっていないと記されている。

帰国後、Cushing は、ボストンにおいて、数多くの弟子たちと共に、脳神経外科領域の歴史として記録に残るような新しい手術法の開発、基礎的・臨床的研究、新たな疾患概念の確立、数多くの論文・著書の著作を展開していくことになるが、それらが、このような自身の感染への罹患と神経疾患発症後の状況下で展開されていたことは印象的である。諸記録を通して、詳細にこれら経過をたどることで、同様のパンデミック感染下にあるわれわれが、将来の医療に対する希望のよりどころを見出す可能性があると考ええる。